

## 第 23 回年次研究大会企画シンポジウム

### 「懸念への力学～安全保障と研究者～」

安全保障環境の緊張は研究者に様々な懸念や葛藤をもたらす。そうした場面は、大量破壊兵器の開発研究に参画するといった劇的な経験から、経済安全保障のため特定の地域との技術協力・交流に制約が加えられて戸惑うといったより近い事例に至るまで既に多種多様に存在する。そうした中で研究者コミュニティの経験も分断され、多様化する。強い良心の呵責や責任の感情と共に研究に従事する人、微かな違和感を押し殺しながら日常生活を送る人、あるいは参画を拒絶し抗議活動に転じる人、逆に愛国心に高揚する人もいる。その結果、英雄に祭り上げられる人もいれば、犯罪者扱いされて心身の自由を失う人もいるだろう。

この企画では、過去の歴史的な事例および近年の時事的な事例を踏まえつつ、いわゆる安全保障研究というものと通常の科学研究とがいかなる違いを持つのか、それにより研究者個人がどのような社会的・心理的状态に置かれるのかを検討し、考察する。とりわけ、「懸念」というキーワードに着目することで、賛成、反対、あるいは決めかねるなど、多様な立場を含む私たち自身が STS 研究者としてこの問題にどう向き合うのかを考える場とすることを目指したい。そのために当日は通常の質疑応答ではなく心理的安全性の担保される対話手法も提案する予定である。本企画が、安全保障と研究者の関係について科学技術社会論でこそ可能な構造的把握および知的交流の機会となることを目指したい。

1. 「「懸念への力学」に対する STS 研究のあり方」 小林信一(広島大学)

2. 「核兵器出現後の世界と日米核物理学者たち:仁科芳雄と J・ロバート・オッペンハイマーを中心に」 伊藤憲二(京都大学)

研究が未知の知識を生み出すものである以上、その結果生み出された知識が社会に及ぼす作用も未知である。研究の結果、人類規模の災厄が引き起こされる知識が生れることもあり、そのような知識が研究者当人によっても社会によっても適切に制御されない、あるいはその危険が認知すらされない状況が起こりえる。研究がより強力な手段や豊富な資源を獲得すればするほど、そのような事態が発生する危険が高まる。これを仮に「プロメテウスの状況」と名づけよう。核兵器の出現は、神話や空想作品でなく現実に起こって記録されたプロメテウスの状況のおそらく最初の例である。この発表では、初期の核兵器の研究・開発に関わった物理学者、とくに J・ロバート・オッペンハイマーと仁科芳雄が、核兵器の出現という「プロメテウスの状況」とそれによって作り変えられた世界に対して持った認識と懸念、そして実際にとった行動を検討し、この状況の構造の一端を分析したい。

### 3. 「吉岡斉の科学批判—軍学共同をめぐって」 綾部広則(早稲田大学)

近年、科学技術の軍事化に対する懸念の声が高まっている。こうした懸念の声に対して吉岡斉は、既存の反対運動(「標準的な軍学共同反対論」という)と結論は共有しつつも、そこには弱点があるとした。なぜ、吉岡は「標準的な軍学共同反対論」には弱点があるとしたのか。それは、両者のどういったアプローチの違いに起因するのか。この発表では、安全保障に関する近年の動きを踏まえつつ、両者のアプローチの違いを整理することで、科学技術社会論としてこの問題へ取り組む際に必要な論点を探ることにしたい。

司会: 隠岐さや香(東京大学)

企画: 夏目賢一

注: 夏目賢一会員は本年九月六日に逝去された。本企画の発案者は夏目会員であり、その遺志を受けての開催となる。

大会企画シンポジウム委員: 綾部広則、江守正多、隠岐さや香、夏目賢一、横山広美